東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2009年9月18日

現代の人間の生き方の選択肢

親愛なるムスリムの皆様。２１世紀の改革運動に続いて台頭した帝国主義が避けることのできない結果として生み出した植民主義は、人々が満たされない世界の産物です。何千万もの人々の虐殺の原因となった民族主義と２０世紀の破壊的な二つの世界大戦もこのような世界の産物です。環境汚染、オゾン層破壊、地球温暖化、世界が破滅への道を進んでいることは、限りのない生産と消費を追い続ける経済システムの結果生まれた問題です。近代的（！）な主張に反し、世界人口の大多数はより貧しく、援助を必要とする状況に陥っています。前世紀には三人の貧困者に対し一人の富裕層の割合であったのが、今日では７２人の貧困者に一人の資本家という割合になっています。どれほどの苦労をしてでも利益をあげることを要求するこのシステムを粉砕し、苦悩の中で息を詰まらせているこの哀れな人々に幸福の道を示すものは、ただイスラームの教えなのです。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。「合法な手段で利益を得て食事をとり、満足すること、必要十分なだけの糧を得ること、不正に他者の財産を搾取しないこと、ザカートを支払うこと、貧者を助けること、アッラーの道において人に食べさせること、恵みに感謝すること」という原則を守り、実践する人は、無責任で限度を知らない消費者となり得るでしょうか？「舌を悪い言葉から守ること、誰かをからかったりしないこと、自分を過大評価しないこと、嘘の証言を行わないこと、嘘をつかないこと、善を命じ悪を避けるよう教えること」という原則を守る人は、消費を無限に煽り立てる広告を出すことができるでしょうか。このような人々が、他者を軽蔑し自分たちだけを選ばれた優れた民族であると見なすことができるでしょうか。「シャイターンを敵と見なし、禁じられたものに目をくれず、悪いことを聞くことから耳を守り、自我の欲望に従わず、死を真実であると見なす」人々に、感情や肉体が快楽を得るようなあらゆる事柄を正しい徳として認識し、自由資本主義が基本的道徳と見なしている「感覚論」を受け入れさせることはできるでしょうか。

「近代的な」幸福の獲得についていうなら、人が自らに、その幸福を追求して害を与えることもまた一つの徳とされ、性の選択としては同性愛もまた人間の権利とされます。中絶などによって次世代を殺してしまうことも一つの権利です。しかし、「同性愛を避け、月経中や出産直後である配偶者と関係を持たないこと、姦通を避けること、アルコールを含む飲み物をとらないこと」という原則は、人がその次世代や知性を守り健康に生きるために必要不可欠なものなのです。

近代的な価値観によって与えられる権利の結果として、多くの国で婚外交渉によって産まれた子供の人口に占める割合が５０パーセントを超えています。質のよい生産者と消費者を育成する欲望を移植された近代の教育機関は、結果として多くの都市で消費財産に満たされた家の中で一人で生きる人々を生み出すでしょう。しかし人には、「家族の中で生きる」ことがふさわしいのではないでしょうか。そう、人には「両親に善を施すこと、親戚を訪問すること」がふさわいいのです。

今日の世界で、人間に自らが「最も尊い被造物」であることを思い起こさせるこれらの価値観のため、まず「信仰する」こと、そして「知を身につける、熟考する、罪を悔悟する、アッラーの道において努力することが必要なのです。